

大伴家持の「防人歌」

村瀬 憲 夫

本稿では、大伴家持の「防人歌」として、次の三組の歌を対象とすることとする。

①「防人が悲別の心を追ひて傷み作る歌一首 并せて短歌」(㊶四三三二一〜四三三三三) 及び無題詞の㊶四三三三四〜四三三三六番歌、②「防人が情のために思ひを陳べて作る歌一首 并せて短歌」(㊶四三三九八〜四四〇〇〇)、③「防人が悲別の情を陳ぶる歌一首 并せて短歌」(㊶四四〇八〜四四一〇二)の三組である。

天平勝宝六年(七五四)四月に兵部少輔となった大伴家持は、翌天平勝宝七歳の二月から三月にかけて、難波において防人の検校の任にあたり、その間に防人達に歌を進上させた。そして二月六日の遠江国を筆頭に、各国の防人歌が進上され、それを家持が採録していくなか

で、家持自身も防人に同情しあるいは防人の気持ちになつて歌を詠んだ。それが、本稿で対象とする①②③三組の歌である。①は二月八日及び九日、②は二月十九日、③は二月二十三日の作である。

なお、家持はこの他にも二月十三日に「私に拙懐を陳ぶる一首 并せて短歌」(㊶四三三六〇〜四三三六二)を、また二月十七日には「独り竜田山の桜花を惜しむ歌一首」以下三首の歌(㊶四三三九五〜四三三九七)を残している。これらの歌も、一連の「防人歌」群の中のものとして見なすべき内容と構成を有する作であることは、伊藤博「防人歌群」(『萬葉』一一九号、昭59・10)に詳しい。

本稿も伊藤論文の指摘に賛成するが、本稿ではあくまでも「防人」を直接に対象として詠んだ①②③に焦点を絞って考察し、二月十三日・十七日の歌々については適

防人の堀江漕ぎ出る伊豆手舟楫取る間なく恋は繁けむ
 (20四三三六)

右、九日に大伴宿禰家持作る。

この④歌との類似表現を追って、まず気づく特徴は、④歌の製作に家持の越中赴任体験が色濃く投影している、という点である（久米常民著『万葉集の文学論的研究』昭和45・3の第二章第二節「万葉「防人歌」について」にすでにその一部について指摘がある）。

家持は天平十八年（七四六）六月に越中国守となり、天平勝宝三年（七五一）七月に少納言となるまでの、丸五年間を越中の国で過ごした。この五年間を家持は将来への希望と責任感を持って過ごしたが、またそれは同時に「悲別」の思い、「望郷」の思いにさいなまれた時期でもあった。初めての地方赴任、しかも妻、大伴一族を都に残しての単身赴任、さらにまた赴任後間もなく弟を失うという痛恨事もあって、悲別・望郷の思いはいやがうえにも高まったのである。

さて具体的に類似表現を追ってみよう。まず、20四三三一番歌後半部の、家で夫の帰りを待つ妻の姿を描いた部分は、家持の次の作品に類似表現がみられる。

……心さぶしく はしきよし 妻の命も 明け来

れば 門に寄り立ち 衣手を 折り返しつつ 夕さ
 れば 床打ち払ひ ぬばたまの 黒髪敷きて いつ
 しかと 嘆かずらむそ……
 (17三九六二)

この歌は、家持が越中に赴任して翌年の春に大病を患い、辛くも回復した折りに詠んだものであるが、抜粋部分は、家持の帰りを待つ妻の姿を想像して描いたところである。

また小野寛「防人との出会―防人の心情を陳べる長歌三作―」（上代文学会編『家持を考える』昭63・8）が指摘するように、四三三一―番歌の「斎瓮を床辺にすゑて」は、家持の越中赴任に際して坂上郎女が贈った、次の歌を踏まえているだろう。

草枕旅行く君を幸くあれと斎瓮すゑつ我が床の辺に
 (17三九二七)

さらに同じく四三三一―番歌の「月日数みつ」などという一般性のありそうな表現も、その類似表現は万葉集中他に四例（④五一〇、①⑦三九八二、①⑧四〇七二、①⑧四一〇一）ほどを認め得る程度である。その四例のうちの一三例（④五一〇以外の三例）までが、家持の越中での作に見られるのである。例えば、奈良の留守宅にいる妻・坂上大嬢に贈るための真珠を願って詠んだ歌に、

……ぬばたまの 夜床片去り 朝寝髪 掻きも梳
 らず 出でて来し 月日数みつつ 嘆くらむ 心な
 ぐさに……
 (18四一〇一)

さてまた④には、四三三二番歌の前半部及び四三三二、四三三三番歌を中心に、大君・大丈夫を意識した表現がみられるが、これも越中時代の家持の作品の中にその類似表現を求めることが出来る。すなわち「大君の……任のまにまに……鶏が鳴く 東男は 出で向かひ顧みせず……大君の 命のまにま……」「ますらをの鞆取り負ひて……」といった表現は、

大君の 任のまにまに ますらをの 心振り起こし
 あしひきの 山坂越えて…… (17三九六二)
 ……鶏が鳴く 東の国の……大君の 辺にこそ
 死なぬ 顧みは せじと言立て ますらをの……
 (18四〇九四)

……大君の 任のまにまに……
 (18四〇九八)

などのように、類似表現を見いだすことが出来る。第一の三九六二番歌は前掲、第二の四〇九四番歌は「陸奥国に金を出だす詔書を賀く歌」、第三の四〇九八番歌は、

その詔書に接した家持が喜びの興奮さめやらず詠んだ「吉野の離宮に幸行さむ時のために儲け作る歌」である。

なお第二の四〇九四番歌詠作の契機となった聖武天皇の詔書には、大伴氏が代々にわたり天皇家に忠誠を誓ってきた家柄であることが述べられているが、『古事記』『日本書紀』の「天孫降臨」の条によれば、大伴氏の先祖である天忍日命は「天の石鞆を取り負ひ」、天孫に仕えたことが分かる。従って、「ますらをの鞆取り負ひて……」などといった表現にも、こうしたものが背後に意識されているのであろう。

ともあれ、越中国守として家持のいだいた大君・大丈夫意識が、④歌の表現へ大きく影響を与えていることは確かである。もちろん家持の大君・大丈夫意識は越中国守時代にのみ限られるわけではなく、安積皇子挽歌(③四七五〜四八〇、天平十六年作)以来、折々に歌われている。ただ家持と防人は共に大君の命によって地方へ派遣されていくという、両者に共通した境遇(といっても両者の間には質の違いも大きい)が、家持の大君・大丈夫意識の④歌への影響をより強いものとしているのである。

なお、二月十三日作の家持の「私に拙懐を陳ぶる一首」(②〇四三六〇～四三六二)は、この大君・大丈夫意識のもとに詠作されたものである。

さて、②〇四三三一番歌には山上憶良の作品との類似表現もまた多く見られる。四三三一番歌の「大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国は……人さにはに 満ちてはあれど……朝なぎに……夕潮に……事し終はらば 障まはず 帰り来ませと……」は、憶良の作品に次のように見られる。

大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国に……

(⑤七九四)

……人さにはに 満ちてはあれど……事終はり
 帰らむ日には……つつみなく 幸くいまして は
 や帰りませ
 ……朝なぎに……夕潮に……

(⑤八九四)

(⑧一五二〇)

第一例は「日本挽歌」、第二例は「好去好来歌」、第三例は「七夕歌」である。家持の「防人歌」に憶良の影響が見られることは、吉永登「防人の廃止と大伴家の人」(『万葉―文学と歴史の間』昭51・7所収)を始めとして指摘があり、本稿でも後にさらに考察を加えたいと

思うが、本節でなお指摘しておきたいのは、家持は越中時代にも憶良を強く意識して詠作に励んでいるという点である。それが最も直接的に出ているのが、天平勝宝二年(七五〇)三月作の「世間の無常を悲しむる歌」(①九四一六〇～四一六二)及び「勇士の名を振るはむことを慕ふ歌」(①九四一六四～四一六五)である。

家持はしなざる越中であって、かつてしらぬひ筑紫に赴任した父・旅人を、そしてその地で父と深い交流のあった憶良のことを折りに触れて思っていたのである。

その意味で、本節で述べている、家持の越中体験の①歌への投影の一つとして、憶良歌からの影響を位置づけることも出来よう。

さて次にその他の類似表現を見てみよう。四三三一番歌の「……月日数みつつ……朝なぎに 水手整へ夕潮に 梶引き折り 率ひて 漕ぎ行く君は 波の間をい行きさぐくみ……」は、丹比等麻呂が筑紫国へ下る時に詠んだ歌に

……朝なぎに 水手の声呼び 夕なぎに 梶の音
 しつつ 波の上を い行きさぐくみ……

(④五〇九)

白たへの袖解きかへて 帰り来む月日を数みて行きて

来ましを

(④五一〇)

と、よく似た表現を見いだすことが出来る。家持は④歌の製作に当たって、筑紫へ下るといふ、防人達と同じ地への旅を詠んだ丹比笠麻呂の歌を参考にしたものと思われる。

また四三三一番歌末尾の「……長き日を 待ちかも恋ひむ 愛しき妻らは」は、柿本人麻呂が「讃岐の狭今の島にして、石の中の死人を見て」作った歌の末尾の

……おほほしく 待ちか恋ふらむ 愛しき妻らは

(②二二〇)

などに依っていると思われる。

さて、④歌との類似表現を追っていつて気づくもう一つの大きな特徴は、④歌は「防人」を詠んだ歌であるにも関わらず、その表現は防人達自身が詠んだ歌のそれとほとんど重ならないという点である。例えば四三三一番歌に「斎瓮を床辺にすゑて」とある。「斎ふ」という言葉自体は防人達自身がしきりに用いているものであるが、防人が「斎瓮」を詠んだのは次の一例のみである。

大君の命にされば父母を斎瓮と置きて参る出来にしを
(②〇四三九三)

しかもこの場合は「父母を斎瓮と置きて」であって、

家持の「斎瓮を床辺にすゑて」は、やはり前掲の坂上郎女の「斎瓮すゑつ我が床の辺に」(⑩三九二七)に依ったとみるべきである。

防人達の防人歌進上が始まるのが二月六日で、④歌の製作が二月八日及び九日であるから、防人達の歌の表現を十分に取り入れる余裕がなかったことにも依るのであるが、ともかく④歌には防人達自身の歌の表現との重なりは少ない。

以上、④歌について類似表現を追ってみた。その結果④歌には家持の越中体験・越中での詠作が色濃く反映していること、また防人達自身の詠作からの投影はほとんどみられないこと、などが顕著な特徴として指摘出来る。

家持は「防人の悲別の心」を詠むにあたって、自らの越中での悲別体験と、その折の自らの大君・大丈夫意識を前面に据えて④歌を製作したのである。

三

では次に④歌の類似表現を追って検討してみたい。

防人が情のために思ひを陳べて作る歌一首 并せて短歌

大君の 命恐み 妻別れ 悲しくはあれど ますらをの 心振り起こし 取り装ひ 門出をすれば たらちねの 母掻き撫で 若草の 妻取り付き 平けく 我は斎はむ ま幸くて はや帰り来と ま袖もち 涙を拭ひ むせひつつ 言問ひすれば 群鳥の出で立ちかてに 滞り 顧みしつつ いや遠に 国を来離れ いや高に 山を越え過ぎ 葦が散る 難波に來居て 夕潮に 舟を浮けすゑ 朝なぎに 舳向け漕がむと さもらふと 我が居る時に 春霞島廻に立ちて 鶴がねの 悲しく鳴けば はろばろに 家を思ひ出 負ひ征箭の そよと鳴るまで 嘆きつるかも (20四三九八)

海原に霞たなびき鶴が音の悲しき夕は国辺し思ほゆ (20四三九九)
家思ふと眠を寝ず居れば鶴が鳴く葦辺も見えず春の霞に (20四四〇〇)

右、十九日に兵部少輔大伴宿禰家持作る。

類似表現を追って先ず気づく特徴は、A歌に比してB歌には、防人達自身の詠んだ歌と重なる表現が見られる

という点である。具体的に見てみよう。四三九八番歌の「……：たらちねの 母掻き撫で 若草の 妻取り付き ……：ま袖もち 涙を拭ひ むせひつつ……：」は、次のような類似表現を防人達の歌の中に見いだすことが出来る。

父母が頭掻き撫で幸くあれて言ひし言葉せ忘れかね づる (20四三九六)

我が母の袖もち撫でて我が故に泣きし心を忘れえぬ かも (20四三五八)

大君の命恐み出で来れば我取り付きて言ひし児なほ も (20四三五八)

韓衣裾に取り付き泣く子らを置きてそ来ぬや母なし にして (20四四〇一)

葦垣の隅処に立ちて我妹子が袖もしほほに泣きしそ 思はゆ (20四三三七)

また四三九八番歌の「……：群鳥の 出で立ちかてに ……：」は、

水鳥の発ちの急ぎに父母に物言ず来にて今ぞ悔しき (20四三三七)

などと響き合う面を持っている。さらに四三九八番歌の「……：平けく 我は斎はむ：

……」の「齋ふ」は、防人達の歌にも多く見られる語である。

国巡るあとにかまけり行き巡り帰り来までに齋ひて待たね (20四三三九)

父母え齋ひて待たね筑紫なる水漬く白玉取りて来ま (20四三四〇)

などに見え、その他に四三三七、四四二六番歌にもこの語が用いられている。なお、この語は家持が越中において詠んだ歌(「長逝せる弟を哀傷ぶる歌」)にも

……ま幸くて 我帰り来む 平らけく 齋ひて待てと…… (17三九五七)

とある。従って、(A)歌と同様自らの越中体験を踏まえつつ、さらに防人達の「齋ふ」を意識して詠作したのが、四三九八番歌の前掲の表現であったと言えよう。

さて次に防人達の歌を離れて、その他の歌との類似表現を追ってみる。四三九八番歌の「……滞り 顧みし つつ いやや遠に 国を来離れ いや高に 山を越え過ぎ ……」は、柿本人麻呂の「石見相聞歌」の

……万たび かへりみすれど いや遠に 里は離りぬ いや高に 山も越え来ぬ…… (2一三二一) と類似した表現を持つ。

また四三九八番歌末尾の「……はるばるに 家を思ひ出 負ひ征箭の そよと鳴るまで 嘆きつるかも」は、

さ夜ふけて妹を思ひ出でしきたへの枕もそよに嘆きつるかも (12二八八五)

……この床の ひしと鳴るまで 嘆きつるかも (13三二七〇)

などの表現を踏まえているのであろう。

さらに四三九八番歌の「……さもらふと 我が居る時に 春霞 島廻に立ちて 鶴がねの 悲しく鳴けば……」及びそれに付せられた短歌の四三九九、四四〇〇番歌には、

葦辺行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕は大和し思はゆ (1六四)

若の浦に白波立ちて沖つ風寒き夕は大和し思ほゆ (7二二一九)

葦の葉に夕霧立ちて鴨が音の寒き夕し汝をば偲はむ (14三五七〇)

などの類似表現がみられる。第一首は難波行幸の折りの志貴皇子の詠作、第二首は「羈旅にして作る」に分類されている藤原卿の作、第三首は卷十四東歌中の「防人

歌」に分類されている歌である。

以上⑩歌の類似表現を見てきたが、ここで④歌と較べて強調すべき特徴は、やはり防人自身の歌と類似する表現が見られるという点である。⑩歌においては、防人の言葉を取入れようという家持の積極的な意志が働いているのである。

ところでここで注目しておきたいのは、⑩歌においては家持は、防人達の歌の表現を積極的に取入れようとしてはいるものの、防人達の悲別の情を歌う、その抒情においては、防人自身に密着した抒情ではなく、あくまでも家持自身の抒情であるという点である。

家持自身の抒情とは、具体的には四三九八番歌の「……春霞 島廻に立ちて 鶴がねの 悲しく鳴けば……」及び四三九九番歌、四四〇〇番歌に端的に表れている。これらはさきに類似表現として挙げたように、志貴皇子・藤原卿に代表される、いわば都人の抒情である。さらに言えば、この抒情は、家持のかの春愁三首のそれに極めて近いものをもっている。

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも
(19四二九〇)

我がやどのいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕

かも

(19四二九一)

うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば
(19四二九二)

防人達の言葉に深く耳を傾けつつも、その悲別の抒情は家持の枠の中での抒情であったのである。

なおさきの類似表現の指摘の中で、東歌中の「防人歌」(14三五七〇)を挙げているが、この歌については前稿(「万葉集卷十四「防人歌」の編纂」『松田好夫先生追悼論文集 万葉学論攷』平成2・4)で指摘したように、この歌はいわゆる防人歌に最も遠く、家持に最も近い性格を持っている歌である。^{補注}

四

次に⑩歌について、その類似表現を追ってみよう。

防人が悲別の情を陳ぶる歌一首 并せて短歌

大君の 任のまにまに 島守に 我が立ち来れば

ははそ葉の 母の命は み裳の裾 摘み上げ掻き撫

で ちちの実の 父の命は たくづのの 白ひげの

上ゆ 涙垂り 嘆きのたばく 鹿子じもの ただひ

とりして 朝戸出の かなしき我が子 あらたまの

年の緒長く 相見ずは 恋しくあるべし 今日だにも
 言問ひせむと 惜しみつつ 悲しびませば 若
 草の 妻も子どもも をちこちに さはに囲み居

春鳥の 声の吟ひ 白たへの 袖泣き濡らし 携は
 り 別れかてにと 引き留め 慕ひしものを 大君
 の 命恐み 玉梓の 道に出で立ち 岡の岬 い廻
 むるごとに 万度 顧みしつつ はろはろに 別れ
 し来れば 思ふそら 安くもあらず 恋ふるそら
 苦しきものを うつせみの 世の人なれば たまき
 はる 命も知らず 海原の 恐き道を 島伝ひ い
 漕ぎ渡りて あり巡り 我が来るまでに 平けく
 親はいまさね つつみなく 妻は待たせと 住吉の
 我が皇神に 幣奉り 祈り申して 難波津に 舟浮
 けすゑ 八十梶貫き 水手整へて 朝開き 我は漕
 ぎ出ぬと 家に告げこそ (20四四〇八)

家人の斎へにかあらむ平けく舟出はしぬと親に申さ
 ね (20四四〇九)

み空行く雲も使ひと人は言へど家づと遣らむたづき
 知らずも (20四四一〇)

家づとに目を拾へる浜波はいやししく高く寄す
 れど (20四四一一)

島陰に我が舟泊てて告げ遣らむ使ひをなみや恋ひつ
 つ行かむ (20四四一二)

二月二十三日、兵部少輔大伴宿禰家持

この◎歌と類似表現を持つ歌は、㊶㊷歌のそれに較べ
 てより多種多様である。以下具体的にみてみよう。

先ず四四〇八番歌の「……ははそ葉の 母の命は……
 ……ちちの 父の命は……」は、家持が越中に
 あつて憶良の作に追和した「勇士の名を振るはむことを
 慕ふ歌」に、
 ちちの 実の 父の命 ははそ葉の 母の命……
 (19四一六四)

とあつて、同様の表現を見ることが出来る。
 次に四四〇八番歌の「……たくづのの 白ひげの上
 ゆ……」の枕詞「たくづのの」は、他には大伴坂上郎
 女が尼理願の死を悲しんで詠んだ挽歌に

たくづのの 新羅の国ゆ…… (3四六〇)

とあるのが、万葉集中唯一の例であつて、家持はこの坂
 上郎女の歌に学んでいるのである。

次に四四〇八番歌の「……鹿子じもの ただひとり
 して……」は、天平五年の遣唐使派遣の際に、難波を
 出航する我が子との悲別の情を詠んだ、遣唐使の母親の

歌に、

……鹿子じもの 我が独り子の……

(⑨一七九〇)

とあり、家持は難波を出航する防人達の境遇を想いつつ、この表現を取り用いたのである。

また四四〇八番歌の「朝戸出の」は、

朝戸出の君が姿をよく見ずて長き春日を恋ひや暮らさむ
(⑩一九二五)

の他に⑩二三五七、⑩二六九二番歌に見える。ちなみに一九二五番歌は、巻十春相聞部に「悲別」として分類されている。

また四四〇八番歌の「……若草の 妻も子どももをちこちに さはに囲み居 春鳥の 声の吟ひ……」は、類似表現が次の様に多様にみられる。

……父母は 枕の方に 妻子どもは 足の方に
囲み居て 憂へ吟ひ…… (⑤八九二)
……春鳥の さまよひぬれば…… (②一九九)
……春鳥の 音のみ泣きつつ……

(⑨一八〇四)

第一首は憶良の「貧窮問答歌」、第二首は柿本人麻呂の「高市皇子挽歌」、第三首は弟の死を傷んで詠んだ挽

歌で、作者は田辺福麻呂である。いずれも貧窮、死といった重苦しい素材を扱った歌に出て来る表現で、防人の置かれた苛酷な境遇を表すのに効果的に働いている。とりわけ、憶良の「貧窮問答歌」を意識しているところに、家持が貴族ではなく農民の「悲別」を意識的に歌おうとしている様を見ることが出来る。

また四四〇八番歌の「……岡の岬 い廻むるごとに万度 顧みし……」は、

……川隅の 八十隅おちず 万たび かへり見し
つつ…… (①七九)

……この道の 八十隅ごとに 万たび かへりみすれど…… (②一三二)

などに見える。第一首は藤原京から寧楽宮に遷る時の作者未詳の作、第二首は人麻呂の「石見相聞歌」である。

また四四〇八番歌の「……うつせみの 世の人なれば たまきはる 命も知らず……」は、

……うつせみの 世の人なれば うちなびき 床に臥い伏し…… (⑩三九六二)

などとある。「うつせみの世の人なれば」云々及びその類似表現はその他にも多く見られるが、家持が越中において大病を患った折に詠んだ、この三九六二番歌の表

現が四四〇八番歌のそれに最も近い。

なおこの表現・発想は、防人歌・東歌には見いだすことが出来ない。さきの「鹿子じものただひとりして」という（防人一般には当てはまりにくい）個別性の強い表現と共に、これもやはり家持の抒情の枠の中での表現と言える。

また四四〇八番歌の「……難波津に 舟浮けすゑ
八十梶貫き 水手整へて 朝開き 我は漕ぎ出ぬと 家
に告げこそ」及び四四〇九番歌は、

難波津にみ舟下ろすゑ八十梶貫き今は漕ぎぬと妹に
告げこそ (四四三六三)

おしてるや難波の津ゆり舟装ひ我は漕ぎぬと妹に告
げこそ (四四三六五)

と、類似表現が防人達自身の歌に見える。
以上◎歌の類似表現を追ってきたが、その特徴はともかく多種多様であるということである。家持、坂上郎女、遣唐使の母親、憶良、人麻呂、福麻呂、そして防人達と、多くの人々の歌の表現を取り入れて、防人の「悲別」の情を歌おうとしているのである。

五

㉔㉕㉖歌のそれぞれについて、長歌を中心にして類似表現を見てきたが、それぞれに特徴があった。

まず㉔歌の製作には、家持自らの越中での体験・詠作（都に親しい人々を残しての赴任という悲別体験、及び大君の命を戴いての地方国守への就任とそれによって一層強調された大君・大丈夫意識の高揚という体験、そしてそれらの体験を踏まえての詠作）が大きく関わっているという特徴が見られた。また防人達の詠んだ歌の表現とは重なる面が少ないという特徴も見られた。

つぎに㉕歌には、防人達の歌の表現と重なる面がかなりあるという特徴、そしてそれと同時に極めて家持的な抒情が展開されているという特徴が見られた。

そして㉖歌には、様々な人々の多様な表現が取り入れられていて、幅広く厚みのある「悲別」歌を製作しようという意図が感じられるという特徴が見られた。

こうして㉔㉕㉖歌のそれぞれの特徴を纏めてみると、家持が防人の「悲別」の心の詠作に真摯に立ち向かっていることがわかる。すなわち、まずは自らの悲別体験をベースにして防人達の悲別の心を想い詠作し、次にはよ

り頻繁に防人達の歌に接する中で、防人達の表現を取り入れつつ詠作し、そして次には防人達をも含めてさらにより幅広い人々の悲別の表現を取り込んで、より豊かな悲別歌の詠作に立ち向かっているのである。

その意味で家持のこの一連の「防人歌」詠作は、防人への家持の熱い心と、そして「防人の悲別」をテーマとして追求しようという、家持の詠作への熱い意欲とによってなされたものであると言うことが出来る。

そしてその防人への熱い心は、防人の悲別の悲しみを歌う時、さきに見たように、防人自身の生の声を歌うというよりは、あくまでも家持の抒情の枠内で展開されたものであったが、しかしそこに家持の限界を見る前に、それは家持の防人達への最大限の同情の心の表出であったとみるべきであろう。

そしてまたその「防人の悲別」をテーマとしての詠作への意欲は、題詞の記し方にもうかがうことが出来る。すなわち憶良の作品に付せられた題詞を踏まえているのである。家持が越中時代以来、憶良を強く意識し続け、**④**歌には憶良のいくつかの作品の表現が踏まえられていることは、さきに見た通りであるが、題詞にもそれが言えるのである。

先ず**④**歌の題詞「防人が悲別の心を追ひて傷み作る歌一首」の「追ひて傷み」は、憶良の「追ひて和する歌一首」(②一四五の題詞、有間皇子関連の追和歌)を、あるいは**⑤**八七二〜八七五番歌の題詞に見られる「追ひて和す」(この作者には諸説があつて憶良の作とも断定出来ないが、いずれにしても憶良・旅人の筑紫歌壇内の作である)を念頭に置いているであろう。越中時代にか持自身も「山上憶良臣の作る歌に追ひて和す」歌(⑩四一六四〜四一六五、家持は**④**歌においてこの歌の言葉を取り用いている)を作っているほどであるから、**④**歌の「追ひて」も憶良を意識してのことと思われる。

さらに「私に拙懐を陳ぶる一首」(⑭四三六〇〜四三六二の題詞)は、憶良の「敢へて私の懐を布ぶる歌三首」(⑤八八〇〜八八二の題詞)を意識してのことである。

また**④**歌の題詞「防人が情のために思ひを陳べて作る歌一首」は、憶良の「熊凝のためにその志を述ぶる歌に敬みて和する六首」(⑤八八六〜八九一の題詞)を踏まえているであろう。この熊凝は「相撲使の従人」として肥後国から上京する途中に病を得、故郷に父母を残したまま十八歳にして客死した人である。防人とていつ熊凝

と同様の運命を辿らないとも限らないわけで、熊凝と防人とは似た境遇に身を置いていたのである。恐らく家持は「防人歌」詠作に際して、直接的な類似表現はないものの、この歌に見られる父母との悲別の悲しみの表現は参考にしていただこうであらう。

このように家持は自らの「防人歌」の製作にあたって、憶良の作品の表現のみならず、その題詞の形式をも学んでいるのである。貧しく苛酷な境遇にある農民に深く同情し、作品をものした憶良に習いつつ、彼らと同様の境遇にある防人達の悲別の悲しみの歌を製作しようとしたのである。

繰り返せば、防人への熱い同情の心と、憶良を始めとする先輩歌人に学びつつ「防人の悲別」を作品として詠作しようという意欲とに支えられて出来た作品、それが家持の「防人歌」であったと言えよう。その作品としての出来栄は、たとえ「平板であつて、情熱に乏しい」作（『萬葉集全註釋』）と評される程度のものであったにしても。

なお、万葉集卷十四東歌中に五首の歌が「防人歌」として分類されているが、この「防人歌」という部立は卷十四の最初の編纂段階からあったものではなく、その後

の編纂段階のある時期に新設追補されたものであると考えられている。前稿（『万葉集卷十四「防人歌」の編纂』）では、この「防人歌」五首の編纂に家持が大きく関わったであろうことを述べた。卷十四「防人歌」の新設追補の時期が不明である以上、もちろん断定は出来ないが、本稿で家持の「防人歌」を検討してきてみて、その蓋然性は一層高まったと思われる。

「防人の悲別」をテーマに、詠作への意欲を燃やした家持なればこそ、卷十四に万葉集中唯一の「防人歌」という新しい部立を追補することが出来たのであり、またこの五首の「防人歌」は内容的にはすべて悲別歌であつて、大きくは「相聞」の部に属することからすれば、卷十四において「防人歌」部が「相聞」と「譬喩歌」（これも内容的には大きくは相聞に属する）との間に位置を占めてうまく収まっているのも、防人達の妻との悲別の心を知悉していた家持の編纂なればこそと思えるのである。

〔補注〕本稿の脱稿後、前稿「万葉集卷十四「防人歌」の編纂」について、田中喜美春氏から貴重な御教示を賜つた。すなわち三五七〇番歌に歌われた鴨は寒さを歌うも

ので、その寒さは共寝の暖かさとは表裏をなしていること、対して四三九八番歌ではそれが鶴になってしまう点に両者の差異があること等を御教示賜った。

三五七〇番歌がいわゆる防人歌に遠く、家持に近いことと変わりはないが、両者には質的な差もあることを、田中氏の御教示によってここに確認しておきたい。